

比庵佳境の会

見わたせば 四方のさくらも 咲きいでて あはれ今年も 春の人なり 比庵九十二

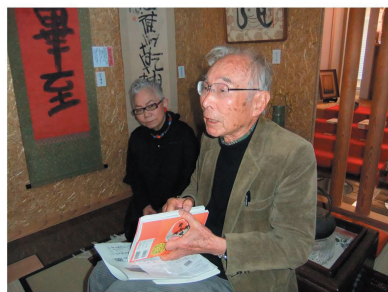


桜

昭和49年

清水比庵の歌友秋田 秋良

秋田 征矢雄（秋田 秋良の子息）



墨の美術館で講話される

秋田 征矢雄氏

（平成28年1月）

岡山県西南の地瀬戸内海に面した柴木という、山里の丘に秋田家の墓地があり、その中に秋田秋良の墓、側面に

「わが歌をひたすらほめてはめてさて

さても涙の墓石を書かしむ 清水比庵」と清水比庵先生の筆になる墓石がある。それ

と呼応する様に二里ほど西の笠岡市の威徳寺に同じ形、大きな比庵先生の墓碑「清水比庵夫妻之墓」側面に

「まじかなる夢を結ぶといふこと

いかにまじきものにあるかも」

がある。この二人がいつ頃出会って親交を深めていったかは定かでないが、比庵先生の妹（章子）さんが笠岡に嫁いで来られ、書歌をよくされていたことからの縁ではなからうか。父が昭和四十六年七十歳で急逝し、遺品の中に宝物のように保存されていた比庵先生の書簡三百十九通の最初が昭和十四年のことからすると、日光町長を辞めて千葉県市川市の自宅に帰って歌書画の三芸に本格的に取組まれる時期である。日本はこれから太平洋戦争へと突入、ほどなく都会から田舎への疎開が起こる。比庵先生も戦中戦後笠岡に疎開さ



れ、父と逢う機会が多くなり、時には桃や梨の花見・野点、笠岡沖での釣りなどを楽しむこともあり、その時の画や歌が多く残っている。学歴差、年齢差（十九歳）が大きい二人が、後半生の長きにわたって親しい心の友として交流を続けたことを比庵先生は父への追悼文で次のように言っておられる。「じぶんには友人は多くいるけれども、相對してまたは手紙の上で秋田君くらい楽しく語ったことはない」（窓日 昭和四十六年六月号）げに言霊の対話に文通に深く豊かな心の交流を美しくもあはれ

に思う。

また父の書いた「野水帖」十首抄感想控（註）について比庵先生が追悼文の中に天下の名文であると絶賛しておられるので、父の選んだ十首を記載する。

- ・花散りて或は寒き日のありぬ
- ・春の行方のしづかなりける
- ・雨ふればとなりの屋根のぬれてあり

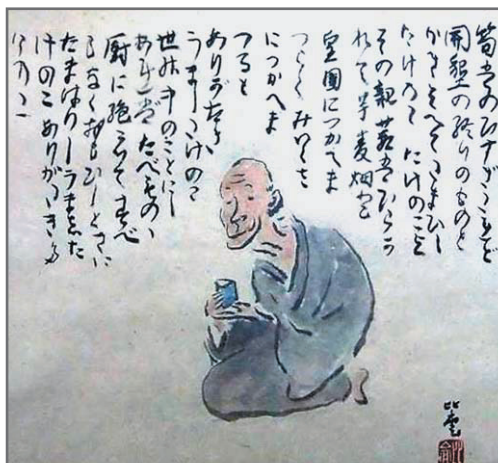


左 秋田秋良の墓碑 右 清水比庵夫妻の墓碑



比庵が秋良に送った作品
 畫をかきて歌を詠みてもたのしめと
 君のあるこそなほたのしけれ 八十一比庵
 (昭和38年)

となりの屋根もわが眺めなり
 ・雨降りてぬれたる道をしばらくは
 誰も通らぬ夕光があり
 ・身のまはり独りみずからすることは
 死にたる妻をおもふことなり
 ・われによく尽してくれてわれをよく
 尚もながらへしめて妹は
 ・まどかなる夢を結ぶといふことの
 いかにもまじけきものにあるかも
 ・山村の雪の消えぬ間のまんさくの
 花のたよりに未だ嫁がず
 ・その姉のことをききに死にしろ
 ただ年老いて死にたりといふ
 ・天翔る窓の下より富士の山
 麓まで見えひとりそびゆる
 ・アポロ人いま月の上にその月が
 半弦にして天にかがやく
 (註)「野水帖(やすいちよう)」十首感想控
 とは比庵の第三溪が比庵の米寿を祝って発
 行した美術本「野水帖」に記載されている歌
 一七〇首から十種を選択しその各々に感想
 文をつけたものである。
 (窓日 昭和四十六年二月号)



筍 (秋田 秋良へのお礼の長歌)
 筍はのびすぎたれど 開墾の終りのものとあきそへて
 たまひしたけのこ たけのこよ その親数はひらかれて
 芋麦畑と 皇国につかへまつらく みいくさにつかへまつると
 ありがたきうましたけのこ 世の中のことにしあれば
 たべものゝ厨に絶えて すべもなくおもひしとき
 たまはりしうましたけのこ ありがたきたけのこ 比庵
 比庵が笠岡に疎開していた昭和二〇年春の作 六十三歳

追記

清水 固 (会長 比庵の孫)

祖父清水比庵は家族(妻・娘・弟妹)はもちろん多くの友人知人に支えられて三芸を完成したが、その中でも歌友秋田秋良氏と交わした言霊(会話・文通)は特に心通ずるものであった。比庵は秋良氏の追悼文にの最後に次の歌を載せている。

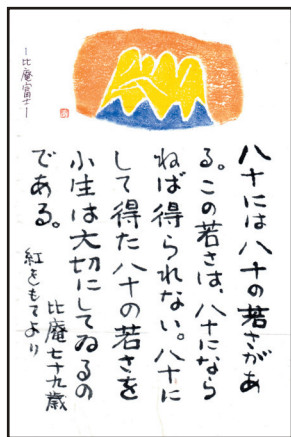
散り残るさくらに沈む日の赤し
 秋田秋良のあまり悲しく

秋良氏のご子息征矢雄氏は本年一月に横浜の墨の美術館で開催した清水比庵展で二人の交流について講話された。
 また父君が遺された比庵からの手紙(葉書)三一九通を吉備路文学館に寄贈し、その約半数が吉備路文学館から「比庵歌だより」として平成二十六年に発刊されている。

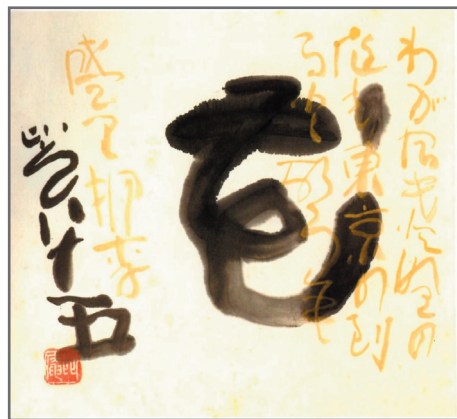
学ぶ楽しみ

片岡 絢子 (会員)

私は今絵手紙に夢中です。思いを込めて書かれた葉書をポストに見つけたときには、言葉にならない程の喜びを感じます。絵手紙の魅力は相手に飾らない自分を素直に表現することです。技術よりも感動する心を伝えるこ



この富士はイモ版画です



花 比庵 八十五



筆者 絵手紙展で

わが宿もとなりの庭も東京のと散らばっています。画面の絶妙なバランスの美しさに圧倒されました。
 比庵作品のような自由で伸び伸びとした表現を目標に、この貴重な体験を仲間へ伝え、絵手紙を続けて行きたいと思えます。

とを大切にしています。そのために展覧会に足を運び、良い作品を見ることそして先人たちの書画から学ぶことを心掛けています。
 そんな中、昨年埼玉県川島町の遠山記念館で清水比庵作品に出合うことができました。
 大胆な表現、その中にやさしい気持があらわれています。真紅な空に雪の富士山が太い金色の線で、これ以上省くことができない形で迫ってきます。
 墨の一字「花」その上に
 わが宿もとなりの庭も東京のと散らばっています。画面の絶妙なバランスの美しさに圧倒されました。

比庵と笠岡

私は岡山県笠岡市で代々に亘り美術商を営む者です。笠岡は岡山県の西の端に位置する人口五万人ほどの小さな処です。北は三方を山に囲まれ南は瀬戸内海に繋がっています。風光明媚な土地柄で山の幸・海の幸に恵まれた温暖な風土です。

清水比庵先生は、妹の嫁ぎ先であるこの笠岡をこよなく愛して生前にこの地に瞑りたいと希望し、自ら墓所を設けています。(笠岡市内・威徳寺) 墓碑には清水家の墓と自書しています。

近年に発刊された「比庵歌だより」(公益財団法人吉備路文学館刊)には、比庵が現在のメール感覚で絵と歌を添えて頻繁に友人に送った葉書が収められています。その中の一文に、「私のふるさと笠岡です。」と断じています。関東大震災、太平洋戦争の難を逃れて疎開した時に縁を結んだ土地の笠岡を心のふるさと、ユートピアのように想っていたと感ずります。

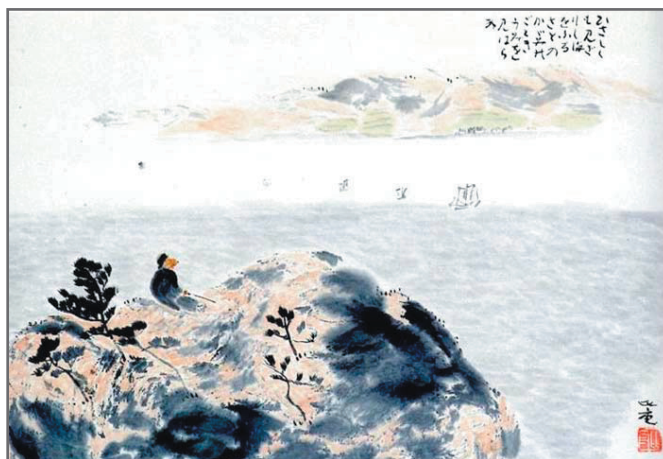
このような土地ですから、笠岡から文化勲章授賞の日本画家・小野竹喬も育っています。小野竹喬は人を暖かく包み込んでくれるような笠岡を多くの絵の題材にしています。比庵先生と竹喬画伯は生前に互いに畏敬の念を持ち交流を重ねています。

私の父・豊池浪二と比庵先生は、二人の共通の知人であり比庵先生の熱烈な支持者であった故・瀬戸健次郎氏(笠岡地域で多くの映画館を経営した実業家)のご紹介でした。比庵先生が笠岡を訪れる時には私も父と一緒に比庵先生に接しました。比庵先生は九十三歳まで作品を残しています。私はこれは摂生と努力の賜物だと想います。

豊池 勇 (会員)

次女を幼くして亡くし、妻に先立たれた悲しみを乗り越えて、芸術生活を続けるには健康が大切と確信が在ったと想います。笠岡の比庵ファンはその辺りをよく心得ていて接待や宴会に比庵先生を煩わせるような事なくお迎えしていました。

或る時、瀬戸さん宅で比庵先生は作品の制作をされました。私はその折に墨を摺らせて頂きました。私が墨を摺っている間に自分の歌集を丁寧に読み直していらつしやいました。出来上がった作品は当意即妙に揮毫し

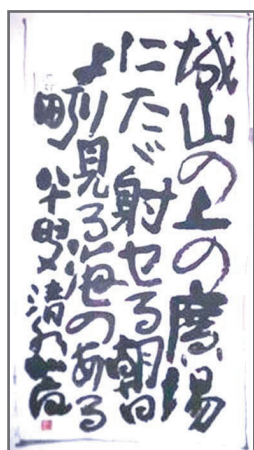


笠岡市寄贈作品 清水比庵「ふるさと」

ひさしくも見ざりし海をふるさとの
かどみのごとき海を見はらす 比庵



歌碑の草稿



城山の歌碑と筆者

た。笠岡・古城山公園に建てられた歌碑の草案も入っていましたのでこれは笠岡市に寄贈させて戴きました。(現在は笠岡市立竹喬美術館で保管されています)

今後も笠岡に地で清水比庵先生の作品を久しくご紹介して行きたいと想っています。

インターネットにサイトを開設しており常時に清水比庵の作品を載せていますのでご覧いただければ幸いと存じます。

(豊池美術店サイト
<http://www.toyoike.co.jp>)

追記

清水固 (会長 比庵の孫)

父との交流で心に残る事は、二人でテレビの相撲中継を観ていた時の事です。勝った負けたと興奮するのではなく、相撲そのものを観ていたようです。殆んど二人共だまつてブラウン管を眺めて、どちらからともなく時折あの勝ち方は品がないとか、つぶやいていました。(比庵は横綱佐田の山のファンであつた。)

父が他界して現在は私が豊池美術店を継いでいます。二年ほど前に所属しております大阪美術倶楽部に二百点を越す比庵作品が売りに出ました。資金の限界がありますので全部は持ち帰ることが叶いませんでしたが、その作品群を店で「清水比庵展」を開催しました。その折に前出の吉備路文学館さんには赤富士を含む多くの作品の御買上を頂きまし

笠岡を自らの芸術のふるさととして愛した比庵が笠岡の中で特に好んだのは、古城山公園(通称城山)と妹の別宅があつた神の島(こうのしま)であつた。笠岡に疎開していた戦中戦後の三年間はもちろんその後も毎年夏を中心に三か月ほど笠岡に在住して笠岡やその周辺の人たちと会い、芸術活動をしていました。

古城山には毎朝散歩に訪れていたが、途中で出会うご婦人のこと、山の上にあつた一本松(老松)のこと、自分の歌碑建立のことなど、短歌誌窓日(下野短歌)に寄稿している随筆「駒込だより(笠岡在中は笠岡だより)」



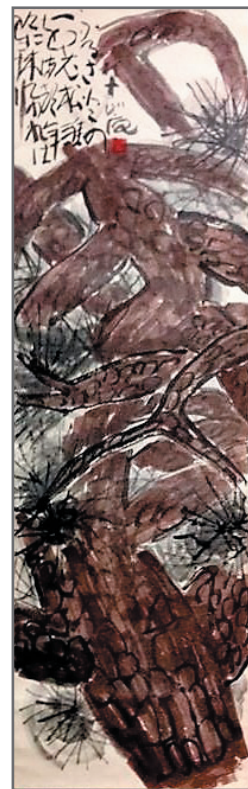
山畑の画

比庵

山畑の草をとりつくたかだかと
隣りの畑とかたりあふ

山の上の（ふるさと）ひとつ老松誰を
待つ年々に来てわれは見にけり
妹章子の別宅があった神の島は当時は笠岡
とは海を隔てた小島であり、比庵は笠岡訪問
中の多くをこの別宅で過ごした。神島につ
いてもいくつかの作品を描いているがその中
の一つに島の女性たちが働くさまを詠んだ長
歌を画賛した山畑の画がある。

の中に色々書いている。歌碑は建立から五十
年近く経って背後の樹木に覆われてきたがこ
れを豊池氏が伐採してきれいな姿に復元して
くれた。一本松はその後伐採されたが比庵が
晩年（八十歳以降）描いている老松の画の画
賛に次の歌を多く載せている。



ふるさとの一つ老松
誰をまつ 年々に来て
われは見にけり
八十比庵

て頂きました。
その日は天候不順にもかかわらず実に多
くの方の来場で嬉しい限りでした。歌・書・
画そして生き方そのもので深い感動を与
える、本当に素晴らしい展覧会だと思いまし
た。



今泉 真知子（会員）

昨年九月中旬横
浜市栄区の区民文
化センター（リリ
ス）で清水比庵展
があり、私は受付
のお手伝いをさせ

清水比庵展を観て

比庵の時代から半世紀経ったが、市立竹
喬美術館では定期的に比庵展を開催して
おり、館長の上蘭四郎氏の比庵芸術の著作も二
冊出版されている。また市長室には比庵の大
書「毎日佳境」の横額が掛けられており、最
近比庵が古城山から海を眺めている作品「ふ
るさと」（前頁に記載）を市に寄贈した

島の子の平らけき
その日その日の安らけき
彼家此家のさまざまの
よしなしごとの美しき
聲のまにまに山鳩は
松の林に頬白は
森のこずゑにさへずりかはす 比庵

お孫さんの清水固氏による来場者へのお
話も、比庵と娘の明子さんを始めとする周り
の方々への情愛に溢れ、画や書に表れる温か
く豊かな心が脈々と受け継がれているように
感じました。

中央に並べられた赤富士・白富士は形も
色もどこまでも気持ちよく、今良寛と盆踊り
はほのぼのと、不動明王と老松は存在感大き
く、頭から離れません。歌・比庵、画・玉堂
の合作（二点）もお互いを先生と呼び合う間
柄が非常に良い形で表されていると思いまし
た。中央テーブルに置かれた本や写真を見た
ら、今もそこで書いて描いているのでは、の
錯覚さえ起こしそうです。

それから二〇一〇年の鎌倉・源吉兆案「
美術館に始まり、横浜・墨の美術館、同光明
寺、埼玉の遠山記念館と展覧会に足を運ぶ毎
に作品にも比庵という人にも魅了され続けて
います。そして今回の作品展の何と見応えの
あったこと。今でもひとつひとつが鮮明に心
に残ります。

私が比庵に最初にめぐりあったのは、篆
刻の師が教室に持ってきて下さった大きな書
の拓本でした。伸び伸びと自由に、更に碑の
石材にも直書きするという大胆さ、驚きまし
た。



バナナと林檎

上から 比庵 八十一
八十五
八十四

会費納入のお願い

28年度の会費を下記に納入されますようお願いいた
します。

一口 1000円（複数口歓迎）

三井住友銀行鶴見支店普通 7061558

名義…クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>

事務局：村上 信行

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-4-2

方そのものだと感じました。
今回の展示作品の殆どが八十、九十代のも
ので、「くれなゐをもて老いを描く」と詠
んだ通りの意気込みが顕われ、比庵芸術の集
大成を観せてもらった気がします。
書道研精会の白黒の「八十五比庵」の一冊よ
り
みんなみのバナナと北の林檎とを
一つに盛りて貧しくあらず
を眺めています。改めて比庵という人の多く
の魅力の要素を感じ、好きな一枚です。
唯々感謝の素晴らしい展覧会でした